

左と見み

別役実
右こう見み

四字熟語

大修館書店

四字熟語

左^と

見^み

右^{こう}見



別役実

大修館書店

[著者紹介]

別役 実 (べつやく みのもる)

劇作家。1937年旧満州生まれ。早稲田大学政経学部中退。
「マッチ売りの少女」「赤い鳥の居る風景」で岸田國士戯曲賞
受賞、「街と飛行船」「不思議の国のアリス」で紀伊國屋演劇
賞受賞、「ジョバンニの父への旅」「諸国を遍歴する二人の騎
士の物語」で芸術選奨文部大臣賞受賞。戯曲のほか、エッセ
イ、評論、童話なども数多く執筆し、主な著書に『マッチ売
りの少女／象』『虫づくし』『けものづくし』『日々の暮し方』
『満ち足りた人生』『当世 商売往来』『思いちがい辞典』『都
市の鑑賞法』『ことわざ悪魔の辞典』『さんずいづくし』『別
役実のコント教室』『ベケットと「いじめ」』などがある。

とみこうみ よじじゅくご
左見右見 四字熟語

© BETSUYAKU Minoru, 2005

NDC810 218p 20cm

初版第1刷——2005年11月1日

著 者——べつやく みのもる
別役 実

発行者——鈴木一行

発行所——株式会社大修館書店

〒101-8466 東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 03-3295-6231(販売部)/03-3294-2355(編集部)

振替 00190-7-40504

[出版情報] <http://www.taishukan.co.jp>

装丁者——山崎 登

印刷所——精興社

製本所——牧製本

ISBN4-469-22173-2

Printed in Japan

図本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上
での例外を除き禁じられています。

左見^と右見^み
四字熟語
目次

焼肉定食…… 9

謹厳実直…… 14

豊年満作…… 19

八方美人…… 24

白河夜船…… 29

七転八起…… 34

天変地異…… 39

一病息災…… 44

巧言令色…… 49

温故知新…… 54

天地無用…… 59

右往左往…… 64

閑話休題…… 69

一望千里…… 74

夜郎自大…… 79

不老長壽…… 84

付和雷同…… 89

隔靴搔痒…… 94

前虎後狼…… 99

牛飲馬食…… 104

有為轉變…… 109

百鬼夜行…… 114

荒唐無稽…… 119

優柔不斷…… 124

無我夢中…… 129

不言實行…… 134

我田引水…… 139

一宿一飯…… 144

飛耳長目…… 149

多生之緣…… 154

日常茶飯……159

羽化登仙……164

輕佻浮薄……169

色即是空……174

鷄口牛後……179

あとがき……209

支離滅裂……184

意馬心猿……189

震天動地……194

暗中摸索……199

画竜点睛……204

*「焼肉定食」～「優柔不断」は『月刊しにか』（大修館書店）二〇〇二年四月号～二〇〇四年三月号に連載。「無我夢中」～「画竜点睛」は書き下ろし。

左見^{とみ}右見^{こうみ}四字熟語

焼肉定食

以前或る試験で、「弱肉強食」の「弱」と「強」を伏せ字にして、「四字熟語を完成させよ」という問題を出したところ、「焼肉定食」という解答が出現した、という有名な話がある。「だそうだよ」と言うと、たいていは「あはは」と笑って、話はそこで終わってしまうのであるが、ある時「で、それは正解とされたのかい」と聞いてきた奴がいた。

そう聞かれてみると、ちょっと困るところではある。確かに「弱肉強食」と違って「焼肉定食」は、世の「四字熟語辞典」なるものには採用されていない。しかし、「四字」より成る「熟語」であることは間違いないのであり、そのあたりの定食屋に入って壁の貼り紙を見れば、たいていこう書かれているのを目にすることが出来るから、一般にもよく知

られている。

もちろん、「それにまつわる有名なエピソードも、教訓もないじゃないか」という考え方は出てくるだろう。「四字熟語」というものは、多くは中国に由来するものであり、それがそのような慣用句になるに至った裏付けとなるエピソードがあって、それによる教訓が含まれている場合が少なくない。しかし、「でなくてはならない」というものではないのである。

しかも、「焼肉定食」だって「弱肉強食」との取り違えがここまで有名になると、それ自体がエピソードになって、間もなく、そこにひとつの教訓を見出すことになるかもしれない。たとえば、「あいつは、焼肉定食みたいな奴だよ」というのが、「わかり切っている路線を、思いがけない方向に踏みはずす奴」の意味に、使われはじめないともかぎらないからである。

「一時停止」もそうである。これも、そのあたりの交差点でいくらか見かけるから、言葉としてはよく知られているが、「四字熟語辞典」には採用されていないであろう。しかし、「あいつは一時停止のきかない奴だね」というように、単に交通用語としてではなく、使われはじめている。つまり、それらしいエピソードこそないものの、他に転用可能な慣

用句にはなりつつあるのであり、それだけで「四字熟語」としても通用しそうな感じがしないでもないのだ。

「いや、四字熟語というのはね」と、こうした考え方に、やや感覚的な異を唱えるものもある。「もっと古風で、鎧兜よろいかぶとで身を固めたような厳めしさがあり、一見それとわからない、含みを持たせた意味を内包しているものなのだ」と。確かに、それは言える。最初にかう開き直られてしまうと、「焼肉定食」や「一時停止」など、ブラック・タイ着用の式場に、アロハ・シャツで紛れこんだような気恥ずかしさを覚える。

我が国の文体には仮名文字による「たおやめぶり」と、漢文のメリハリを生かした「ますらおぶり」があると言われていた。双方とも、口語文体の導入により廃れたと言っているのだが、「四字熟語」にだけ何故か、既に廃れたはずの「ますらおぶり」のメリハリが残されているのであり、それが「鎧兜で身を固めたような」という印象を与えるのであろう。そして、「それこそが四字熟語の四字熟語たる所以のものである」と主張したがる理由も、その意味でよくわかる。

というのは、「たおやめぶり」というのが女性のものであり、「ますらおぶり」というのが男性のものであることは、言うまでもないことであるが、これまでの我が国の文体の歴

史を振り返って見る時、ことごとく「ますらおぶり」の敗退の過程であったことに気付く。口語文体の出現により、双方が廃れたとはいえ、これもひとつの、「文体の女性化」にほかならない。

つまり、この長期にわたる流れの中で男性は、自らの言葉とその言いまわしを、なしくずしに女性化させられ、奪われていったのであり、かろうじて残されているのが、文体における断片としての「四字熟語」だけだった、というわけだ。第二次大戦後、民主化の風潮の中で政治家の演説が、いわゆる「演説口調」であることを失い、「語りかける演説」（口語文体化である）に変わった時が、その最後だったとも言えるであろう。

ともかく、その意味で今日の「四字熟語」というのは、「かつては男も言葉を持っていたのだよ」ということを示す、記念碑的なものになりつつある、と言っているのである。日常語の中にそれが入りこんでくると、新石器時代の地層に旧石器時代の遺物が紛れこんできたような異物感があり、「誰かが人を驚かそうとして、こっそり埋めこんだのではないか」ということにもなりかねないが、それはそのせいである。

しかし、にもかかわらずここへきて、「四字熟語」がやはりつつある。「四字熟語辞典」なるものが出来たのも、最近のことであろう。これは、「男性用語」であり、男性的なもの

のをすべて排除しようという風潮の中で、当然忌避されてしかるべきもののように思われるが、ひとところ問題にされた片仮名表記の外来語ほどにも、邪魔立てされていない。

もしかしたら、かつて「四字熟語」にあった男性的な「匂い」は既に失われて、その珍奇で骨張った字面の手触りと、音韻法則の独自性のみが、面白がられているのかもしれない。ありそうなことである。最近のポップ・ソングは、断片の日本語と英語との混合によるものが多いのであるが、間もなくそこに「四字熟語」が入りこんでくる可能性は、大いに考えられるだろう。

というわけで今回、世にある「四字熟語」なるものをひねくりまわしてみたいと考える。考古学者が、そのあたりを掘って、何やら意味ありげなものを見出し、ためつすがめつする手つき、と考えてみていただければわかりやすい。「四字熟語」は、どうやらそういう時代のものになりつつあるのである。

謹厳実直

「そう言えばそういう言葉もあったな」というのが、大方の感想に違いない。これが美德であった時代は終わったのである。もちろん、いつ終わったのかということは誰にもわからない。ただ、高度経済成長期が「そろそろバブルかな」という段階に入ったころ、「これからは二宮金次郎の時代ではなく、三年寝太郎の時代だよ」と言われはじめていたから、「恐らくはそのあたり」と見当をつけておいて、ほぼ間違いないだろう。

少なくともそれ以前には、「謹厳実直を絵に描いたような人」というのが、我々の周辺に一人か二人は必ずいた。私は「謹厳実直」というと何故か、例の袖がすり切れることを防いで袖につけた、「袖カバー」のことを思い出すのだが、紺色の事務服にそれをつけ、